原　著

ボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による変化―実践コミュニティの視点―：質的システマティックレビュー

堀　田　かおり（群馬大学大学院保健学研究科）
石　丸　美　奈（千葉大学大学院看護学研究院）

本研究の目的は，実践コミュニティの概念を用いてボランティア活動を行う高齢者グループの学習の要素と学習による高齢者個人・グループの変化を文献より明らかにし，ボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による変化について仮説的な枠組みを作成することである。CINAHL，MEDLINE，PsycInfo，医中誌Web，CiNiiを用いて，ボランティア活動による高齢者個人またはグループの変化が記述されている12文献を選定し，質的記述的に分析した。結果，高齢者グループの学習の要素18カテゴリ，個人の変化５カテゴリ，グループの変化３カテゴリを得た。

ボランティア活動における高齢者グループの学習は，【メンバー同士で折り合いをつけた活動】や【支援対象者からの学び】等の相互交流から【高齢者の心身の健康と生活への支援】や【自己の能力・知識の向上】，【地域における高齢者の生きがい・居場所づくりの支援】等が目的となり，【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】や【日常生活に役立つ知識・技術・情報】を共有して活動することにより，【継続的に学び合う居場所】となり【地域社会における役割と課題の付与】をもたらすと構造的にとらえることができた。ボランティア活動における学習は，高齢者の健康づくりに波及しており，さらに地域づくりへと波及する可能性が示唆された。

KEY WORDS：older people's groups, volunteer activities, communities of practice, learning

Ⅰ．はじめに

高齢化率が一貫して上昇している日本においては，元気な高齢者が生活支援の担い手として活躍することにより，高齢者自身の生きがいや介護予防にもつながる[1]とされ，高齢者の積極的な地域参加が求められている。改正社会福祉法[2]には，地域住民が地域生活課題の解決に資する支援関係機関と連携することによりその解決を図ることが明記されており，住民の主体的な支え合いの重要性も高まっている。

高齢者の健康について，島田ら[3]は，生理的機構が正常で環境と適応し，生活機能が自立し，個々の健康の側面がトータルに調和している状況の「安定性」，その人が目指す方向をもち，自己の可能性を実現する性質の「実現性」，その人自身の価値や信念に関わる人生の意味と現実が一致することで得られる全体的感覚を表す「全体性」の３つの観点で示した。高齢者の健康を維持するためは，身体的，精神的な健康だけでなく，社会で役割を持ち自己実現することにより社会的な健康を維持，向上することも重要であると考えられる。

高齢者が地域社会で役割を担うことの一つとして，ボランティア活動がある。小石[4]や吉田[5]は，高齢者にとってボランティア活動は社会的役割となるだけではなく，今後の自分自身の健康や生き方を考える学習になっていることを明らかにしている。また，高齢者がグループで活動を行うことにより，認識や行動が愛他的になる[6]ことや活動による交流を通して人間関係が広がる[6),7]ことが明らかにされている。高齢者は，他者と共にボランティア活動をすることによって，自分自身の健康や他者への関わり方，グループのあり方について考えたり学んだりすること，すなわち学習が行われており，この学習によって高齢者個人の認識や行動，グループの関係性や活動形態が変化し，さらに高齢者個人の変化とグループの変化は相互に作用していると考えられる。しかし，学習の要素やその過程は明らかになっていない。また学習による高齢者個人・グループの変化の具体的内容と変化における相互の関係性も明らかにされていない。そのため，ボランティア活動における学習と学習による変化

Received : 11. 11. 2020　Accepted : 7. 15. 2021.　　doi : 10.20776/S13448846-27-1-P61

を高齢者個人・グループの双方の視点から捉える必要がある。

人や環境の相互関係の中で成立する学習は，構成主義的な学習とされ，構成主義における学習理論の１つに「実践コミュニティ」「正統的周辺参加」「文化的透明性」の概念で構成された状況的学習論[8]がある。これは，「相互関与」「共同の営み」「共有領域」の要素で構成された「実践コミュニティ」において，学びが起こる形態の特徴[9]を指す「正統的周辺参加」として学習を捉えることで，個人の身の上に起こったなんらかの変化が，ある実践においてどのような意味を持つのかに焦点を当て，学習とアイデンティティの相互構成的な関係を分離せずに考えて学習が生じる文脈まで分析ができ[9]，「文化的透明性」として活動の意味と本質を具体的な実践を通して見出していく[9]プロセスに焦点を当てた理論である。Wenger[10),11)]は，実践コミュニティにおける学習を「相互関与」「共同の営み」「共有領域」の３つの要素を用いた創発的構造であるとし，実践コミュニティへ参加し，成員同士で相互に関わりながら活動することにより，成員たちおよび実践コミュニティが「活動の意味」を見出していく過程であるとした。

そこで，本研究では，ボランティア活動を行う高齢者グループを実践コミュニティと捉え，先行研究を幅広く収集して二次分析することにより，高齢者グループの学習と学習による高齢者個人・グループの変化の導出を考えた。これらの導出により，高齢者グループのボランティア活動の支援を検討する一助となり，高齢者の身体的，精神的，社会的な健康の向上に寄与すると考えられる。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，何が学ばれているかを理解するための分析手段[9]である実践コミュニティの概念を用いてボランティア活動を行う高齢者グループの学習の要素とボランティア活動における学習を通した高齢者個人・グループの変化を文献より明らかにし，ボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による変化について仮説的な枠組みを作成することである。

Ⅲ．用語の定義

・高齢者グループ：高齢者が中心となって活動を運営している集団。
・相互関与：ボランティア活動における多様な交流，共同で活動する関係，相互交流によるグループの維持。
・共同の営み：活動の目的・目標，関心，ルールや方針。
・共有領域：共有されている知識や技術，方法，道具，行動，会話，考え方。
・活動の意味：活動の継続によって新たに見出した意味。
・学習：状況的学習論を参考にし，高齢者同士で相互交流しながら活動の目的や目標を共有し，共通の方法や考え方で活動を行うことにより，高齢者個人およびグループが活動の意味を見出す過程。
・個人の変化：高齢者個人の認識や行動が変化すること。
・グループの変化：グループの機能や関係性，活動の形態が変化すること。

Ⅳ．研究方法

本研究は，記述的質的研究[12]とし，ボランティア活動による学習と学習による変化を包括的に捉えるために質的システマティックレビューを実施した。

１．文献収集方法

データベースは，英文献と和文献を網羅するために，CINAHL，MEDLINE，PsycInfo，医中誌Web，CiNiiを用いた。発行年と文献の種類は限定せず，幅広く対象とした。CINAHL，MEDLINE，PsycInfoは絞込み条件を「英語」「査読あり」とした。

１）ボランティア活動における高齢者グループの学習の要素と高齢者個人の変化

英文献の検索語は，MeSH Termを用い，「aged」と「volunteers」が必ず入り，「value of life」「learning」のいずれかが入る，とした。和文献の検索語は，シソーラスの「高齢者」と「ボランティア」が必ず入り，本研究における学習を示す「学習」「意味」「経験」のいずれかが入る，とした。文献検索は，2019年12月に実施し，英文献1,262件，和文献435件，計1,697件を抽出した。選定基準は，ボランティア活動を行うことによる高齢者の認識・行動の変化が記述されているものとし，除外基準は，「ボランティア活動を行っている者が高齢者ではないこと」，「災害支援ボランティアなど日常の活動でないこと」，「地域で行われた活動ではないこと」とした。文献検索より抽出した1,697件およびその他の情報源より特定した13件の計1,710件のうち，重複文献を除外した1,258件について表題および抄録より1,231件を除外した。表題および抄録により除外できなかった文献は，全文を精読した。その結果，高齢者以外を含む７件，高齢者の変化の記載がない10件を除外し，英文献６件，和文献４件の計10件を分析対象文献とした（図１）。

２）ボランティア活動における高齢者グループの学習の要素と高齢者グループの変化

英文献の検索語は，MeSH Termを用い，「aged」が必ず入り，「self-help groups」「community participation」の

いずれかが入る，とした。和文献の検索語は，シソーラスの「高齢者」が必ず入り,「自主グループ」「自主活動」のいずれかが入る，とした。文献検索は，2020年２月に実施し，英文献5,671件，和文献203件，計5,874件を抽出した。選定基準は，自主的にグループでボランティア活動を行うことによる高齢者グループの変化が記述されているものとし，ボランティア活動の内容は問わないこととした。除外基準は,「高齢者グループの中の個人の変化に焦点をあてているもの」とした。文献検索より抽出した5,874件およびその他の情報源より特定した３件の計5,877件のうち，重複文献を除外した5,380件について表題および抄録より5,366件を除外した。表題および抄録により除外できなかった文献は，全文を精読した。その結果，高齢者グループの変化の記述がない12件を除外し，和文献２件の計２件を分析対象文献とした（図２）。

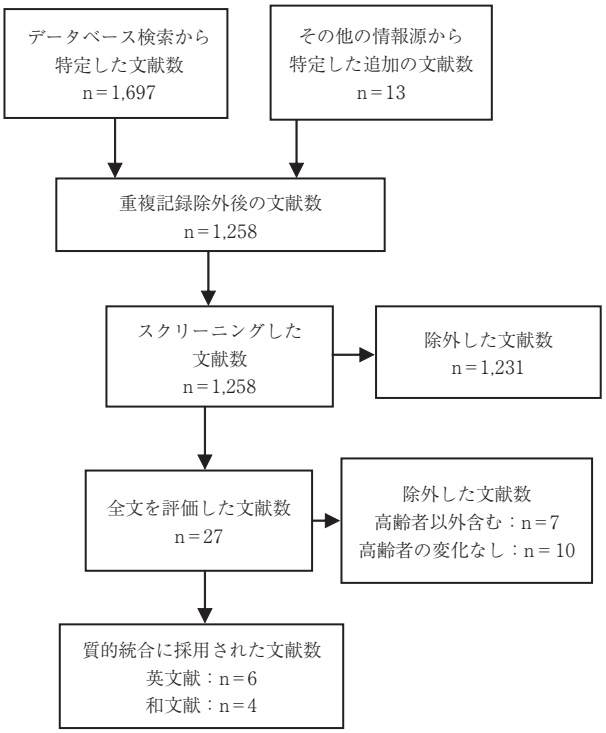

図１　PRISMA フローチャート

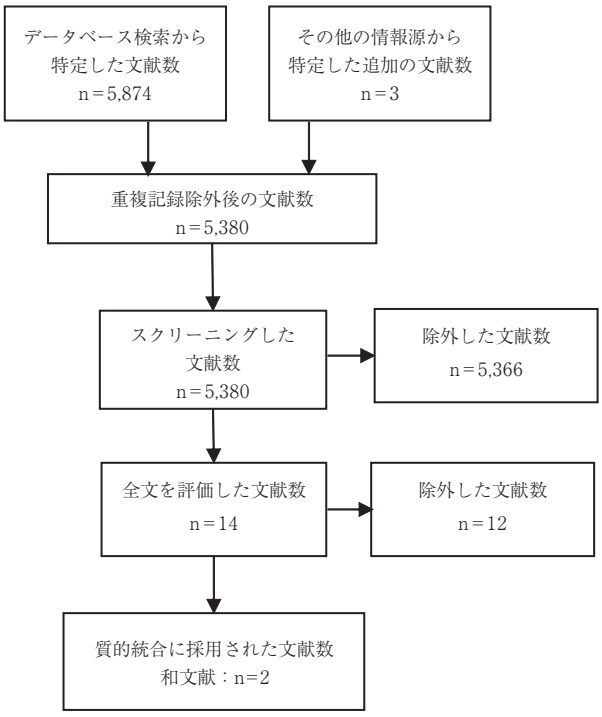

図２　PRISMA フローチャート

２．分析方法

対象文献計12件（表１）について，①ボランティア活動を行う高齢者グループの学習の要素である「相互関与」「共同の営み」「共有領域」「活動の意味」について，本研究における定義に照らし合わせ，各要素として読み取れる記述をデータとして取り出した。また，文献収集方法１）で抽出された10件の対象文献より「高齢者個人」の変化として読み取れる記述と文献収集方法２）で抽出された２件の対象文献より「高齢者グループ」の変化として読み取れる記述をデータとして取り出した。②取り出したデータについて，意味内容の類似性に基づき，サブカテゴリ，カテゴリ化を行った。③学習の要素および「高齢者個人」「高齢者グループ」の変化は，サブカテゴリやデータの文脈を確認しながら各カテゴリ間の関係性を検討し，変化の方向に基づいてカテゴリを配置することで構造化してボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による変化について仮説的な枠組みを作成した。

なお，分析の過程においては，共同研究者間で内容の確認を行い，妥当性を確保した。

Ⅴ．倫理的配慮

分析対象とする文献を記述する際は，個人名や機関名等が特定されないように配慮した。

Ⅵ．結　果

１．ボランティア活動における高齢者グループの学習の要素

ボランティア活動における高齢者グループの学習の要素は，115データから38サブカテゴリ，18カテゴリに整理された（表２）。「相互関与」「共同の営み」「共有領域」の各要素内では，カテゴリ間に関連がみられた。カテゴリを【　】，サブカテゴリを〈　〉，データを［　］で示す（以下，同様）。要素ごとに結果を説明する。

表１　分析対象文献一覧

	筆頭著者名：論文タイトル	変　化*		出　典	発表年
		個人	グループ		
1	目黒達哉：高齢者の自己成長に傾聴ボランティア経験が及ぼす効果	○		ライフケアジャーナル，9(1)：7－15	2018
2	小石真子，他：独居高齢者サロンにおける高齢者のボランティア活動の実態	○		日本健康医学会雑誌，25：304－307	2016
3	板井麻衣，他：女性高齢者がボランティアを実施する中での思い	○		保健師ジャーナル，70(10)：878－887	2014
4	村瀬純子，他：中山間地域における自主グループの活動継続要因について		○	保健の科学，53(4)：267－273	2011
5	橋口博行，他：都市部における高齢者の自主グループ活動を推進する要因		○	応用老年学，3(1)：68－77	2009
6	高木修，他：現実場面における援助効果，援助成果の検証	○		関西大学社会学部紀要，33(1)：59－86	2001
7	Li-Kuang Chen: Benefits and dynamics of learning gained through volunteering: A qualitative exploration guided by seniors' self-defined successful aging	○		EDUCATIONAL GERONTOLOGY, 42(3)	2016
8	Li-Kuang Chen: Not just helping: What and how older men learn when they volunteer	○		EDUCATIONAL GERONTOLOGY, 42(3)	2016
9	Miya Narushima: 'Payback time': community volunteering among older adults as a transformative mechanism	○		Aging & Society, 25	2005
10	Miya Narushima: Transformation Toward What End? Exploring Later Life Learning in Community Volunteering	○		Proceedings of the 41st Annual Adult Education Research Conference	2000
11	Miya Narushima: Transformative Learning Theory and the Study of Aging: The Implication of Case Studies of Older Volunteers	○		Paper presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association	1999
12	Bradley Dana Burr: A Reason to Rise Each Morning: The Meaning of Volunteering in the Lives of Older Adults	○		GENERATIONS, 23(4)	1999

＊個人は，「高齢者個人」の変化を抽出し，グループは，「高齢者グループ」の変化を抽出

1）相互関与

高齢者グループでは，［異なる背景・違うアプローチをするメンバーと折り合いをつけ，一緒に活動する］など〈メンバー間で話し合い折り合いをつけて活動する〉ことや［その月に何をするか決めるためにメンバーで集まる］など〈メンバー同士で活動内容を相談する〉ことによる【メンバー同士で折り合いをつけた活動】を行い，〈グループ活動を継続させるための検討を行う〉という【グループ活動を継続させる検討】をしていた。活動の中では，［ボランティア活動を行うメンバーと情報を伝えあったり協力したりする］等〈メンバー同士で話題を共有し情報交換する〉や〈知識や技術を伝える〉といった【知識・技術・情報の共有】が行われていた。また，〈支援対象者との関係性を築くために接し方を工夫する〉ことや〈他のメンバーと助け合って活動するために助言・共感する〉ことなど【接し方の工夫による他者との関係性の構築】に努めていた。支援対象者と関係を築きながら支援をする中で〈支援対象者の前向きな姿勢から学ぶ〉，［対象者は先輩が多いため，お話を聞いているとためになること教えられることが多い］等〈支援対象者から人生の最期を学ぶ〉，〈他者の生き方を理解する〉といった【支援対象者からの学び】を得ていた。これらの関わりにより［メンバーの熱心な行動によって意欲が高まる］等〈メンバーとの交流から個人の活動意欲が高まる〉や［自分自身も頑張る力をもらっている］等〈支援対象者との関わりから活動意欲が沸く〉といった【ボランティア活動の意欲が高まる交流】となっていた。また，〈メンバー同士で助け合いながら活動する〉，〈メンバー同士で打ち解けた交流をする〉，〈支援対象者との関係が深まる〉など【ボランティアコミュニティの関係性の深化】がみられた。

2）共同の営み

高齢者グループは，〈グループの目標や理念を共有する〉，［班長を中心にそれぞれの役割を明確にする］などの〈各メンバーの役割を決める〉，〈活動を運営する計画・ルールを決める〉など【活動の運営方針】に基づき，［ボランティアをきっかけにパソコンを始め，パソコン操作技術を習得する］等〈活動を通して技術を習得

表２　高齢者グループのボランティア活動における学習の要素

要素	カテゴリ	サブカテゴリ	個人	グループ
相互関与	メンバー同士で折り合いをつけた活動	メンバー間で話し合い折り合いをつけて活動する	○	
		メンバー同士で活動内容を相談する	○	○
	グループ活動を継続させる検討	グループ活動を継続させるための検討を行う		○
	知識・技術・情報の共有	メンバー同士で話題を共有し情報交換する	○	○
		知識や技術を伝える	○	
	接し方の工夫による他者との関係性の構築	支援対象者との関係性を築くために接し方を工夫する	○	
		他のメンバーと助け合って活動するために助言・共感する	○	
	支援対象者からの学び	支援対象者の前向きな姿勢から学ぶ	○	
		支援対象者から人生の最期を学ぶ	○	
		他者の生き方を理解する	○	
	ボランティア活動の意欲が高まる交流	メンバーとの交流から個人の活動意欲が高まる	○	
		支援対象者との関わりから活動意欲が沸く	○	
	ボランティアコミュニティの関係性の深化	メンバー同士で助け合いながら活動する	○	○
		メンバー同士で打ち解けた交流をする	○	○
		支援対象者との関係が深まる	○	
共同の営み	活動の運営方針	グループの目標や理念を共有する		○
		各メンバーの役割を決める	○	
		活動を運営する計画・ルールを決める	○	
	自己の能力・知識の向上	活動を通して技術を習得する	○	
		活動に関わる自己の関心・知識を増やしたい	○	
	社会貢献と他者との交流の希求	活動を通して地域社会に貢献し続けたい	○	
		人との交流や社会問題への関与により社会的交流を継続したい	○	
	高齢者の心身の健康と生活への支援	高齢者の身体機能の維持を支援する	○	○
		高齢者の孤独感に寄り添う	○	
		高齢者の生活の質を高める支援を行う	○	
		高齢者の健康づくりを行う		○
	地域における高齢者の生きがい・居場所づくりの支援	高齢者の生きがいづくりを支援する		○
		高齢者の地域の居場所をつくる		○
共有領域	グループの活動スタイル	ボランティアと支援対象者が自由に交流する	○	
		活動の改善点や方向性を共有する機会を設ける	○	
	活動の質を向上させる知識・技術・ツール	活動の質を向上させるための知識と技術	○	
		活動を円滑に行うための資料を作成する	○	
	日常生活に役立つ知識・技術・情報	健康や社会問題に関する知識や情報	○	
		対人関係を円滑にするための技術	○	
活動の意味	継続的に学び合う居場所	他者と継続的に学び合う居場所である	○	
	地域社会における役割と課題の付与	地域において役割ができる	○	○
		日常生活において情熱を注ぐ役割ができる	○	
	自己の知識，スキル，経験を活かした社会貢献の自覚	自分の知識，スキル，経験を活かして地域社会に貢献できる	○	

する〉こと，〈活動に関わる自己の関心・知識を増やしたい〉等【自己の能力・知識の向上】や〈活動を通して地域社会に貢献し続けたい〉，〈人との交流や社会問題への関与により社会的交流を継続したい〉という【社会貢献と他者との交流の希求】，〈高齢者の身体機能の維持を支援する〉，〈高齢者の孤独感に寄り添う〉，〈高齢者の生活の質を高める支援を行う〉，〈高齢者の健康づくりを行う〉など【高齢者の心身の健康と生活への支援】，〈高齢者の生きがいつくりを支援する〉や〈高齢者の地域の居場所をつくる〉などの【地域における高齢者の生きがい・居場所づくりの支援】を活動の目的としていた。

3）共有領域

高齢者グループでは，〈ボランティアと支援対象者が自由に交流する〉，〈活動の改善点や方向性を共有する機会を設ける〉等【グループの活動スタイル】で〈活動の質を向上させるための知識と技術〉，［高齢者に何か出来事が起こったときに何をすればよいのかがわかる資料を作成する］等〈活動を円滑に行うための資料を作成する〉の【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】，〈健康や社会問題に関する知識や情報〉や［自分たちの組織や一般社会でうまく対応する方法］等〈対人関係を円滑にするための技術〉の【日常生活に役立つ知識・技術・情報】を資源として共有していた。

4）活動の意味

高齢者個人およびグループは，ボランティア活動を継続する中で，〈他者と継続的に学び合う居場所である〉といった【継続的に学び合う居場所】や［活動を手伝ったり自分の出番ができたりするなど自分の役割ができる］等〈地域において役割ができる〉，〈日常生活において情熱を注ぐ課題ができる〉，のように【地域社会における役割と課題の付与】される場，［健康の為にやっている体操の知識がボランティアの中で役に立った］等【自己の知識，スキル，経験を活かした社会貢献の自覚】を得られる活動として意味づけていた。

2．ボランティア活動における学習を通した高齢者個人の変化

ボランティア活動による学習を通した高齢者個人の変化は，55データから14サブカテゴリ，5カテゴリに整理された（表3）。以下に結果を説明する。

表3　高齢者個人の変化

カテゴリ	サブカテゴリ
健康の重要性の認識	健康維持の重要性に気付く
精神的健康の向上	他者の役に立っていると感じるようになる
	生きがい・やりがいが生まれた
	幸福感・満足感を得るようになる
	考え方・感じ方が前向きになった
自己の受け容れ	自己効力感を得る
	自己肯定感を得る
	自己理解が深まる
	人生の最期を考えるようになる
	人として成熟する
他者との肯定的な関係の構築	他者への理解が深まる
	他者に共感するようになった
	日常生活における他者との関わり合いが拡がる
地域貢献の意識の高まり	地域で新たな役割を果たしたい気持ちが芽生える

高齢者は，活動による学習を通して，〈健康維持の重要性に気付く〉といった【健康の重要性の認識】に変化がみられたり，〈他者の役に立っていると感じるようになる〉，〈生きがい・やりがいが生まれた〉，〈幸福感・満足感を得るようになる〉，〈考え方・感じ方が前向きになった〉等の【精神的健康の向上】がみられたりした。また，［自分は健康で活動の過程に起こった問題を解決する能力があると自信を持った］等〈自己効力感を得る〉，［自分は価値があると思うようになった］等〈自己肯定感を得る〉，〈自己理解が深まる〉，〈人生の最期を考えるようになる〉，［自分が心を開くことにより相手を受け入れる豊かさを得られた気がする］等〈人として成熟する〉の【自己の受け容れ】がみられた。その結果，〈他者への理解が深まる〉，〈他者に共感するようになった〉，〈日常生活における他者との関わり合いが拡がる〉の【他者との肯定的な関係の構築】や［お返しをするという意識が芽生え，地域に貢献する気持ちが芽生えた］等〈地域で新たな役割を果たしたい気持ちが芽生える〉という【地域貢献の意識の高まり】など他者や地域社会へと意識が向くようになっていた。

3．ボランティア活動における学習を通した高齢者グループの変化

ボランティア活動による学習を通した高齢者グループの変化は，9データから6サブカテゴリ，3カテゴリに整理された（表4）。以下に結果を説明する。

高齢者グループは，［活動がマンネリ化する・活動するためのスタッフが足りないなど知識や人材などの活動継続に関する問題が発生する］という〈活動の継続により新たな問題が生じるようになる〉ため［参加者を増やす工夫をするようになる］等〈活動内容を工夫するようになる〉ことで【活動継続に関する問題の発生と改善策の実施】に取り組むようになっていた。それらの取り組みにより，〈地域でグループが認められ参加者が増える〉

表4　高齢者グループの変化

カテゴリ	サブカテゴリ
活動継続に関する問題の発生と改善策の実施	活動の継続により新たな問題が生じるようになる
	活動内容を工夫するようになる
グループ内の効力感の高まり	地域でグループが認められ参加者が増える
	グループ拡大によりメンバーがグループを認めるようになる
活動の視野・方向性の拡がり	活動方針に地域・公共の視点が加わるようになる
	他グループと交流したり協働したりして活動するようになる

や〈グループ拡大によりメンバーがグループを認めるようになる〉等【グループ内の効力感の高まり】がみられ，［タウンミーティングへの参加や計画を市に持っていくなどグループとして地域に働きかけるようになる］等〈活動方針に地域・公共の視点が加わるようになる〉，〈他グループと交流したり協働したりして活動するようになる〉の【活動の視野・方向性の拡がり】がみられるようになっていた。

Ⅶ. 考　察

高齢者グループのボランティア活動への支援を検討するために，状況的学習論における実践コミュニティの概念を用いてボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による高齢者個人・グループの変化を統合して仮説的な枠組みを作成した（図３）。

１．ボランティア活動を行う高齢者グループの学習の特徴

ボランティア活動を行う高齢者グループの学習は，【メンバー同士で折り合いをつけた活動】や【支援対象者からの学び】などを通して【ボランティアコミュニティの関係性の深化】が進む相互交流から【高齢者の心身の健康と生活への支援】や【地域における高齢者の生きがい・居場所づくりの支援】，【社会貢献と他者との交流の希求】などが活動の目的となり，共通の【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】だけでなく，【日常生活に役立つ知識・技術・情報】も共有しながら活動することにより，【継続的に学び合う居場所】となり【地域社会における役割と課題の付与】をもたらすと構造的にとらえることができた（図３）。

実践コミュニティにおいては，形成の基礎として「相互関与」があり，コミュニティを存在づける「共同の営み」が存在し，コミュニティの参加者がお互いに「共有領域」が成り立つようになる[13] といわれている。本研究では，メンバー同士や支援対象者による【ボランティア活動の意欲が高まる交流】や【ボランティアコミュニティの関係性の深化】などの「相互関与」がみられた。親密な関係を形成することについて，同じ世代に属していることや共通の関心をもっていること，共通の文化をもっていることなど社会文化的に同質性が高い人同士は，関係が形成されやすい[14] といわれている。本研究のグループは，メンバーや支援対象者が同世代であり，ボランティア活動という共通の関心を持っている高齢者

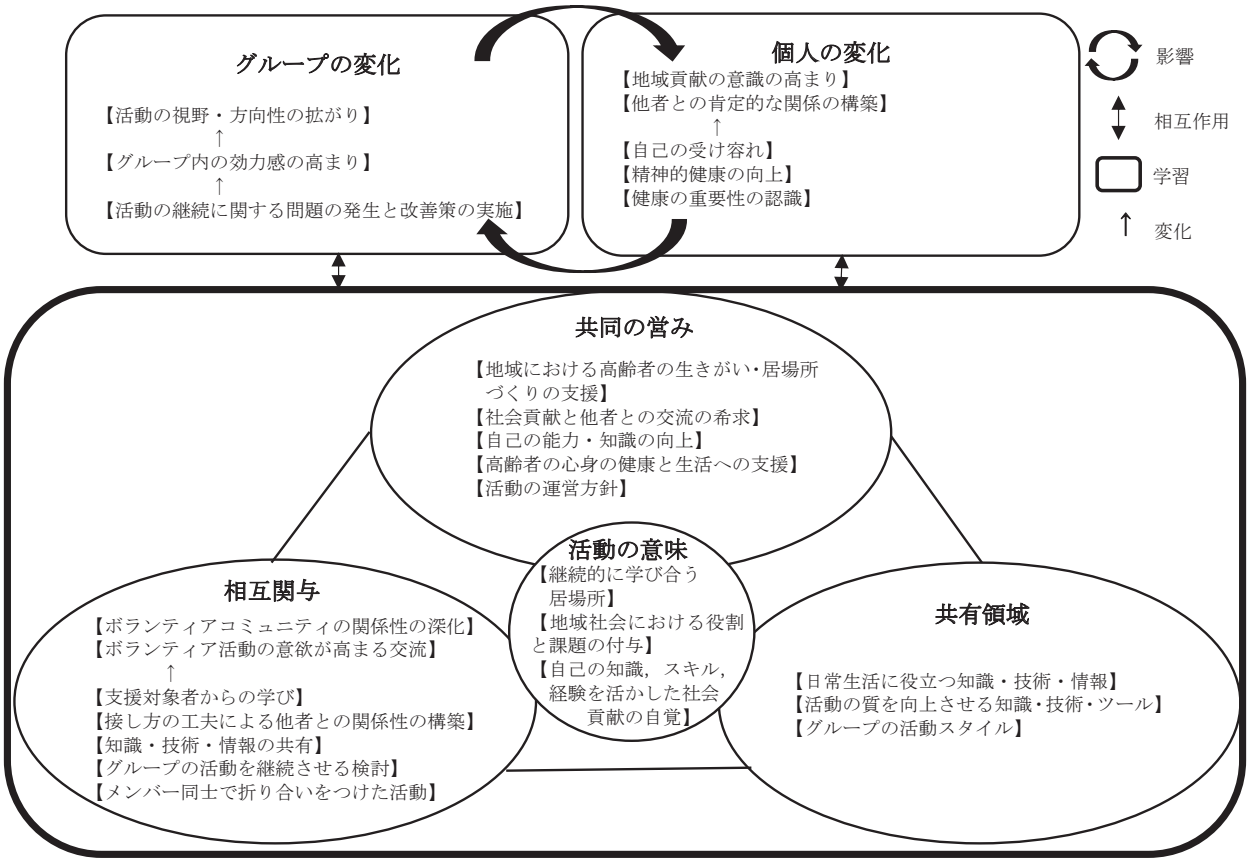

図３　ボランティア活動における高齢者グループの学習の仮説的枠組み

同士が共に活動することにより関係性が深まり，実践コミュニティの形成が促進されていると考えられた。そのコミュニティを存在づける「共同の営み」の一つとして【地域における高齢者の生きがい・居場所づくりの支援】が抽出された。高齢者の居場所について，上野ら[15]は，人の集まる物理的居場所，人と関係やつながりを持てる社会的居場所，高齢者が感じている居心地や心の拠り所の心理的居場所に類型している。高齢者グループは，活動を通して高齢者の精神的健康の支援を行っているのみならず，地域における関係づくりにも寄与していると考えられる。相互に関わり合いながら，共通の目的をもとに活動した結果，「共有領域」として【日常生活に役立つ知識・技術・情報】も共有されていた。高齢期は，退職や子育ての終了，配偶者との死別，身体機能の低下など様々な喪失を経験する時期である。Baltesは，生涯発達の観点から，補償を伴う選択的最適化理論[16]を提唱し，若いころよりも狭い領域を探索して特定の目標に絞り，機能低下を補う手段や方法を獲得して喪失を補い，その狭い領域や特定の目標に最適な方略をとって適応の機会を増やす[17]対処法を述べている。活動の場が地域社会に移行し，加齢による心身機能の低下も感じる高齢者は，〈健康や社会問題に関する知識や情報〉や〈対人関係を円滑にするための技術〉などを共有することにより，健康を維持増進させたり，新たな活動の場で人間関係を構築したりすることで高齢期の生活に適応していると考えられた。また，野中[18]は，暗黙知と形式知は相互補完的な関係にあり，実践コミュニティでは人と人の間で文脈を共有することにより暗黙知を移転するとしている。高齢者グループにおける学習では，知識や技術，情報などの形式知だけではなく，グループ内の暗黙のルールや合図などの暗黙知も共有していると考えられた。

高齢者グループでは，これらの相互的な関わりを通して【継続的に学び合う居場所】であり【地域社会における役割と課題の付与】がされる活動と捉えるようになっていた。高齢期における地域社会について，澤岡[19]は定年退職や子育ての終了とともに失われる居場所と出番（＝社会的役割）を補完し得る場であると述べている。高齢者にとってグループは，居場所となり，活動において役割ができるため，地域における役割を得ることができる活動として意味づけていると考えられた。

２．ボランティア活動における学習を通した高齢者個人と高齢者グループの変化

高齢者グループでは，ボランティア活動における学習を通して，高齢者個人の認識や行動とグループの機能や関係性，活動の形態にポジティブな変化がみられた。学習により高齢者個人およびグループはエンパワメントが促進されたと考えられる。

エンパワメントについて，清水[20]は「グループへの参加」―「グループ内での対話・問題に対する批判的検討」―「問題意識と仲間意識の高揚」―「行動」の過程が共通してみられ，これらの行動やその成果が新たな参加やより熱心な参加を促すことで新たなエンパワメントの過程が始まるとしている。高齢者は，グループの活動に参加して「相互関与」である［ボランティア活動を行うメンバーと情報を伝えあったり協力したりする］，［異なる背景・違うアプローチをするメンバーと折り合いをつけ，一緒に活動する］中で〈活動の継続により新たな問題が生じるようになる〉場合でも問題意識を持ち，〈活動内容を工夫するようになる〉ことにより【グループ内の効力感の高まり】が生じると考えられた。その結果，〈他グループと交流したり協働したりして活動するようになる〉など【活動の視野・方向性の拡がり】が起こることによって活動における学習にも作用すると考えられた。

高齢者のボランティア活動への参加について，日下ら[21]は，自分や社会のために役立ちたいという意識をもって活動に参加することが参加者の社会的な有用感を高め自己の価値に対する感情を肯定的に変化させると述べている。ボランティア活動における学習では，「共同の営み」として【社会貢献と他者との交流の希求】があり，活動の継続によって〈地域において役割ができる〉等，【地域社会における役割と課題の付与】をもたらすと意味を見出していた。この学習によって［自分は価値があると思うようになった］などの【自己の受け容れ】や［自分を必要とされていることを実感している］など【精神的健康の向上】につながったと考えられる。また，麻原ら[22]は，セルフ・ヘルプグループのグループメンバーの意識の変化について，「私の問題」から「私たちグループの問題」へと認識や価値観が変化し，その変化は「地域の問題」にも取り組む活力になっていくと述べている。「共同の営み」として【自己の能力・知識の向上】など自己に向いていた認識が学習を通して【自己の受け容れ】が起こったことにより【他者との肯定的な関係の構築】や【地域貢献の意識の高まり】へと変化したと考えられた。その変化は学習に作用し，「共同の営み」の【地域における高齢者の生きがい・居場所づくりの支援】につながったと考えた。

３．ボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による変化の仮説的枠組み

高齢者グループの学習は，「相互関与」「共同の営み」

「共有領域」が相互に作用し，活動を継続することで活動の意味を見出していると考えられる。しかし，３つの要素の関係性と意味を見出す過程を結果から示すのは限界があるため，３つの要素が関係していることを示す線で結び，「活動の意味」を３つの要素と重ねて位置付けた。また，高齢者個人が【他者との肯定的な関係の構築】ができるようになることは，【グループ内の効力感の高まり】に影響し，グループの【活動の視野・方向性の拡がり】は高齢者の【地域貢献の意識の高まり】にも影響すると考えられる。これらのように高齢者グループおよび個人の変化は相互に影響すると考えた。安孫子ら[22]は，自主グループ活動への参加は地域で暮らす仲間との交流となり，仲間との交流が互助という地域づくりへと広がっていくことを示唆している。高齢者が身近な地域でボランティア活動をグループで行うことは，他者から学び，自分自身の存在価値も実感できる交流となり，地域づくりへの波及も期待できると考えた。

これらより，今後は，地域における高齢者グループのボランティア活動が高齢者の健康づくりや地域づくりをもたらすための支援方法を検討できると考えられた。

Ⅷ．研究の限界と課題

本研究は，高齢者グループを実践コミュニティと捉え，幅広く文献を収集することによって高齢者グループの学習と学習による高齢者個人およびグループの変化について仮説的な枠組みを作成した。学習の要素や高齢者個人・グループの変化は導出されたが，先行研究の二次分析であることから，学習の過程や高齢者個人とグループの変化の関係性を示すには限界があった。また，非言語的な「相互関与」や暗黙知は不明である。今後は，本仮説的枠組みをもとに高齢者グループへの面接調査と参与観察を行うことにより修正していく必要がある。

本研究は，一部をTranscultural Nursing Society Conference in Japan 2020（2020年７月）において発表した。なお，本研究における利益相反はない。

引用文献

１）厚生労働省：生活支援サービスの充実と高齢者の社会参加，https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link5.pdf（検索日2020年８月16日）
２）厚生労働省：社会福祉法，https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=82001000&dataType=0&pageNo=1（検索日2020年８月16日）
３）島田広美，谷本真理子，黒田久美子，田所良之，北島美奈，高橋良幸，菅谷綾子，正木治恵：高齢者の健康の特質に関する文献検討，老年看護学，11(2)：40－47，2007.
４）小石真子：独居高齢者サロンにおけるボランティア活動の実態，日本健康医学会雑誌，24(3)：240－241，2015.
５）吉田和枝：地域ボランティア活動を行う高齢者女性の参加の意味と運営方法，日本看護学会論文集：地域看護，41：49－52，2011.
６）妹尾香織，高木修：援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果，社会心理学研究，18(2)：106－118，2003.
７）板井麻衣，齋藤尚子，中山久子，櫻井しのぶ：女性高齢者がボランティアを実施する中での思い　肯定的要因と否定的要因に着目して，保健師ジャーナル，70(10)：878－887，2014.
８）ジーン・レイヴ，エティエンヌ・ウェンガー：状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加（佐伯胖訳），産業図書，1993.
９）伊藤崇，藤本愉，川俣智路，鹿嶋桃子，山口雄，保坂和貴，城間祥子，佐藤公治：状況的学習観における「文化的透明性」概念について：Wengerの学位論文とそこから示唆されること，北海道大学大学院教育学研究科紀要，93：81－157，2004.
10）Wenger Etienne: Community of Practice: Learning, Meaning, and Identity, Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1998.
11）Wenger Etienne: Toward a Theory of Cultural Transparency: Elements of a Social Discourse of the Visible and the Invisible (PhD Dissertation), University of California, Irvine, 1990.
12）D. F. ポートリット＆C. T. ベック：看護研究　原理と方法（近藤潤子監訳），第２版，医学書院，2011.
13）平出美栄子：実践コミュニティ概念の検討―経営・マーケティングへの適用のために―，経済科学論究，12：53－65，2015.
14）Mima Cattan, Caroline Newell, John Bond, Martin White: Alleviating social isolation and loneliness among older people, The international journal of mental health promotion, 5(3): 20－30, 2003.
15）上野佳代，菊池和美，長田久雄：国内文献にみる高齢者の居場所に関する研究―エイジング・イン・プレイスにむけて―，老年学雑誌，8：33－50，2018.
16）Baltes Paul B: On the incomplete architecture of human ontogeny: Selection, optimization, and compensation as foundation of developmental theory, The American psychologist, 52(4)：366－380, 1997.
17）佐藤眞一：第１章　老年心理学研究の新展開，最新老年心理学（松田修編），第１版，ワールドプランニング，1－13，2018.
18）野中郁次郎：解説，コミュニティ・オブ・プラクティス（野村恭彦監修），初版，翔泳社，333－343，2002.
19）澤岡詩野：地域での居場所創りと高齢者の健康増進，Geriatric Medicine，51(9)：923－926，2013.
20）清水準一：ヘルスプロモーションにおけるエンパワーメントの概念と実践，看護研究，30(6)：453－458，1997.

21）日下菜穂子，篠置昭男：中高年者のボランティア活動参加の意義，老年社会科学，19(2)：151－159，1998.
22）麻原きよみ，加藤典子，宮崎紀枝：グループ活動が地域に発展するための理論・技術，看護研究，36(7)：49－63，2003.
23）安孫子尚子，原田小夜：高齢者が自主グループ活動の参加に至った過程，聖泉看護学研究，5：25－34，2016.

分析対象文献

分析対象文献12件は，本文中の表１に論文タイトル，第一著者名，出版年を掲載した。

GROUP LEARNING AND CHANGES DUE TO LEARNING IN OLDER PEOPLE'S GROUPS DURING VOLUNTEER ACTIVITIES: A VIEWPOINT OF COMMUNITIES OF PRACTICE: QUALITATIVE SYSTEMATIC REVIEW

Kaori Hotta[*1], Mina Ishimaru[*2]
[*1]: Graduate School of Health Sciences, Gunma University
[*2]: Graduate School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :
older people's groups, volunteer activities, communities of practice, learning

The aim of this study was to use concepts of community practice from the relevant literature to explain the elements of learning among older people's groups undertaking volunteer activities and the changes in older individuals and groups through learning, as well as to establish a hypothetical framework of learning by older people's groups through volunteer activities.

Twelve articles that described results from volunteer activities, namely, changes in older individuals or changes in the group as a whole, were selected from CINAHL, MEDLINE, PsycInfo, Japan Medical Abstracts Society Web version, and CiNii. They were qualitatively and descriptively analyzed. We then identified 18 categories of elements of learning among older people's groups, 5 categories of individual change, and 3 categories of group change.

The process by which groups of older people learn through volunteer activities can be understood as follows. Goals, including "supporting the physical and mental health of older people," "improving individual skills and knowledge 'and' supporting a sense of purpose and place for older people within the community," emerge from reciprocal interactions provided by "activities negotiated among group members 'and' learning from the recipients of support." By conducting activities through sharing "knowledge, techniques, and tools to improve the quality of activities" and "knowledge, techniques, and information useful for daily lives", the volunteer activities were structurally perceived to be a "place to learn from each other on an ongoing basis" that "grants roles and tasks in the local community". Learning through volunteer activities may have positive benefits for the health and well-being of older people and, by extension, for the wider community.